



令和 5 年 9 月 1 日  
令和 5 年度学校だより NO.19②  
加古川市立平荘小学校

## 2学期が始まりました 行事も盛り沢山です



今年度で平荘小学校は閉校となります。既に1学期が終わり、残すは2・3学期となりました。

閉校事業実行委員会で、令和5年度の閉校事業について計画を立ててきました。

1学期は、運動会で地域参加型イベントとしてふれあい玉入れとドローンによる全員写真撮影をしました。

2学期は、11月23日に閉校事業イベントⅠ部として狂言発表会を、そして、12月2日に閉校事業イベントⅡ部としてオープンスクールでの地域参加型イベント（懐かしの校舎内でのクイズラリーや平荘小学校の思い出をテーマとした展示室等）を計画しています。

また、学校行事としては、自然学校（5年生）・修学旅行（6年生）・各学年の校外学習（1～4年）・音楽会・狂言発表会等々、盛り沢山です。

『行事は人を育てる』です。子どもたちが、一つ一つの行事を全力で取り組み力を伸ばすとともに、平荘小学校での楽しい思い出をたくさん作ってほしいと思います。

## 2学期、狂言学習始まる！

今年の狂言発表会が、23年間続けてきた『平荘狂言』の集大成となります。

去る7月31日に、「今年度の狂言学習について」や「22年間の平荘狂言を振り返って」や「狂言学習に対する山口先生の考えについて」等を、山口耕道先生と打ち合わせをしてきました。

山口先生が平荘小学校に狂言の指導に来てくださるようになってから今年で**23年目**になります。

狂言学習が始まって、**最初の3年間**は浴衣や袴ではなく、**祭のはっぴを着て演じていました**。そして、**4年目**になって、**肩衣をつけました**。



22年間の平荘狂言を振り返った時、思い出に残っているのは、今から10年ほど前に、加古川市民会館で2クラスの児童が、『附子』と『猿唄』を演じたことです。

学校の授業での『狂言』は、**全員が何かの役をするリレー式（つなげる経験）で行っています**。一人一人が少しでも狂言を経験できるのがいいと思います。

そして、「**舞台に立つ**」という経験、**観られているという経験**ができるのがいいです。

《若い時の山口先生の経験より》  
—ドイツ人の演出家との出会い—

このドイツ人の演出家は、**自分がやってきたことに対して拍手をしてくれました**。けっして否定はされなかったです。**自分がやってきたことは、考えたり時間をさいてやってきたりしているから**です。この演出家は、必ずほめてくれました。

この演出家は、自分がやるのだという気持ちにさせてくれます。（山口先生も、そのような関わりをしたいとおっしゃっています）

**演じる時、先輩たちがやってきたことを踏襲しようとするのではダメです**。同じことの繰り返し（真似）よりも、**自分たちで創り上げてくるのが大事**なのです。

極力、**自分たちで作っていく意識**をもってほしいです。**自分たちで作ってきたものは、充実感や満足感**があり、**いい狂言**になります。

**子どもたちが頑張って考えて稽古してきたことは、その子たちなりの工夫や努力**があります。それを、**大切にしたい**と思います。そう、心がけています。

**やらされる自分から、  
（自ら）やる自分へ**

演じ手は、観る人にきちんと  
応えないといけない。自分がき  
ちんと演じたら、必ず反応があ  
ります。  
声が小さくても、その子の真  
剣さで、観客は耳を傾けます。

R4.10.27 撮影



演じ手は、口の動  
きや顔の表情が大事  
です。  
素直さで勝負して  
ほしいです。  
みんなで盛り上が  
ってきたら、いいも  
のができます。

今年は特別の年だけれど、  
今までと同じように臨んでほ  
しい。舞台の上の緊張や見て  
いる人（観客）の視線（目  
線）を感じてほしいし、経験  
してほしいです。雰囲気（五  
感・第六感）で、ものすごく  
注目してもらっているとい  
うことを感じてほしいです。  
しんがりは、大事です。

狂言は、笑いの芸能  
です。笑いの場面は決  
まっています。そこへ  
いくまでが大事なの  
です。笑い以前の狂言  
が、笑いの場面につな  
がっています。演じ手  
は、自分のところだけ  
ではなく、自分の前  
は、どのように演じて  
いたのかをきちんと理  
解することが大事で  
す。自分でしっかりと  
役を理解していない  
と、観客には伝わりま  
せん。

舞台に立つと、誰も助けてくれませ  
ん。失敗も経験です。失敗した時にどう  
するかが大事です。

「みなさんに喜んでもらえるように、感  
動を与えるように・・・」は、おこがま  
しい。それよりも、自分自身が感動を覚  
えるようになったらいいと考えます。

『舞台』は、演じ手よりも観  
客の方がより多くのことを感  
じます。観客は（観る側）  
は、自由なのです。観客の中  
には、演じ手の顔ばかり観る  
人もいれば、足先だけを観て  
いる人もいます。また、指先  
を観ている人もいます。演じ  
手は、観客にあらゆるところ  
を観られているのです。

狂言と映像との違うところ  
は、狂言は観客が演じ手の表  
現を生で観ています。つま  
り、観客（自分）が観たいも  
のを観、聴きたいものを聴い  
ているのです。ところが、カ  
メラマンが撮影している映像  
では、撮影しているカメラマ  
ンの意図が映像の中に入っ  
ています。観客は、カメラマ  
ンの意図も含めて映像を観て  
いるのです。

映っていないところで、他  
の人はどんな動きをしている  
のでしょうか。

《コメディの原点》

「人の目線がいけないところ、そこに目がいけないとあかん！」

「大阪城は、誰が作りましたか？」

「豊臣秀吉」

ブブー！！！！

「大工さん」笑笑笑

★ものの見方の目先を変えると笑いが起こります。そこが、おもしろ  
いのです。

狂言の表現で一番大事なことは、ゆっくりはっきりと話すこと  
です。変な声色はいりません。声色は、大人になったらついてくるも  
のです。

あいさつをする際に、自分で  
考えた言葉は、相手によく伝わ  
ります。思いが入っているから  
です。

狂言は、変わる時です。チャンス  
です。役を演じる中で、「私にはこんな  
ところがあったのだ。」と発見するこ  
とがあります。人は、とかくレットルを  
はられがちですが・・・。

声には個人差があります。よく通る声もあれば、通  
らない声もあります。

演ずる時に、「私は声が小さいから」という理由で  
逃げたらあかん！観客は、声が小さくとも聴いてくだ  
さる。

『君にしかない』自分の声を、大事にしてほしいで  
す。

子どもたちは、まじめに取り組んでくれるからうれ  
しいです。

